

子宮頸がんを乗り越え、リンパ浮腫と闘う美容師



広告流布に歩く時間が「楽しくて、うれしくて」と加藤さん。おちゃめなキャラで、ひまわりのようにみんなを明るくする。同志いわく「加藤さんはファイターです」

【茨城県牛久市】あかね色の夕空が、夏の名残を浮かべる。美容師の加藤由香さん(52)＝支部女性部長＝は、店の明かりを落すと、母と並んでウオーキングを楽しむ。草むらの虫が弦を弾き、マリーゴールドが風に身を揺らす。ありふれた景色がいとおい。群青へと移ろう空の下、加藤さんは「歩く喜び」を噛み締める。(9月23日付)

幸せは自分の中にある

2001年(平成13年)6月、13時に及ぶ広汎子宮全摘手術を受けた。子宮と左側の卵巣、その一部にあるリンパ節を切除した。手術は成功し、また母と並んで美容室でハサミを握ることができた。5年



28歳の春だった。車で退出していた時、突然、腹部の激痛に襲われた。トイレに駆け込むと、おびただしい出血。大学病院で精密検査を受けた結果は、ステージ3の子宮頸がんだった。自宅に帰り、病院で書き取ったメモを開く。「5年生存率は17%以下」。マラソンに趣味の健康一色だった人生に、不吉な死の色が浮かび上がった。父母に心配をかけまいと明るく振る舞っていたが、自分の部屋で一人になると涙が止まらなくなった。私、死にじやうのか……。『どこでもいいから逃げ出したかった』

病室に置かれたノートには、題目の記録がびっしり。「祈りのかなわないこととは、絶対にならないよ。祖母の確信に引く張られるように、加藤さんも題目で恐怖を押し返した。隣で一緒に祈ってくれた母、加藤さん(18)は地区副女性部長や同志、手術前には木金女の父も手を合わせてくれた。『みななの題目が、私を抱き締めてくれた』

あざをつくった。スカートををはかなくなった。スポンも大きいサイズの専門店を訪ねたが、4しでも脚が通らず、何も買わぬまま店を後にする。好きだったオシャレを遠ざけるようになった。体温調節もうまく働かなくなり、40度以上の発熱に悩まされ、入退院を繰り返した。理学療法を根気よく続けたが、たいした効果は得られなかった。

むしばまれる体も苦しかったが、それ以上に心が泣いていた。小学生の頃、文集に「普通の母さんになりたい」とつづった。手術台に上る時、もう子どもは望めないと覚悟を決めた。それでも同級生に子どもが生まれ、幸せそうなママのほほえみを見ると、おなかの手術傷がきりりと痛む。一度は結ばれた絆も去っていった。

加藤さんは、自分の人生に幸せを求めるのをやめた。ある時、華装グループ(美容関係に携わる女子部「金蘭」の集い)の会合で闘病の体験を語った。その日、池田先生から伝言が届いた。「幸せになりなさい」との一言だった。

加藤さん(左)が父の膝をカッ「切りすぎじゃないか?」と心配する父に、母・悦子さん(右)が大笑い



「広布のために歩ける脚になりたい」

この脚で立てるのは今日が最後かもしれない。この人に会いに行けるのは、今日が最後になるかもしれない。だから今日を大切に、悔いなく生きよう。そう決めて歩みを進めた。体はポロポロ。でも心は晴れやかだった。苦悩する同志が、信心で奮闘を打ち破り、とておきのスマイルを見送られる。『これが私の幸せなんだ』と気付くことができた。ある時、髪を短くしたいと美容室を訪れた若い女性が、「今度、抗がん剤治療が始まるんです」とつぶやいた。無理に繕う笑顔が自分と重なり、「実は私も」と話しかけた。女性の目に涙がにじんだ。新しいヘアスタイルで店を後にする僕は、その顔に、やわらかな笑みが浮かんでいた。これまでの涙の歩みが、自分の言葉が、少しでも人の希望になれていると思うと、たまらなくうれしかった。『法華経を信ずる人は、さいわいを万の外の外よりあつむべし』(新2037・全149頁)。幸せは追いかける

ものじやなくて、自分の中にあるのだと知ることができた。脚がむくむ「リンパ浮腫」との闘いも20年がすぎた。いよいよ立ち作業も難しくなり、車いすの購入を考えていた頃、セカンドビニオンで訪れた病院で、医師から「リンパ管を静脈につなぐ手術」を提案された。新しい治療法で症例も少なく、リスクもある。一度はためらったが、女性部の先輩の一言に背中を押された。『広宣流布のために歩ける脚にしてください』と祈るのよ」

手術前、細身のスポンを買って病室の棚に置いた。『絶対に、はいてみせる。病魔への勝利宣言だった。半日がかりの手術を終え、ベッドの上で目を覚ました。そっと脚を触ると「自分の脚じゃないみたい」に細かった。ベッドから下りられるようになると、スポンに脚を通してみた。これまでの20年がワウのように、すんなりはけた。うれしくてうれしくて、病院の鏡の前で何度も自分の姿を眺めた。5年間で6回の手術を受けた。脚はどんどん細くなった。ここまで頑張ってきた自分の脚に、感謝の目を送り、恩返しした広布に歩いた。

今もデベロップやサポーターは欠かせないし、定期的な通院も必要となる。だが、加藤さんは「今も闘っていることが私の誇り」と笑う。美容室の鏡が映す、お客との笑顔のひとつとき、隣にどんな時も寄り、支え続けてくれた母がいる。店を閉めた後は、大好きな同志の元へ歩みを弾ませて向かう。生きる喜びが胸いっぱいあふれている。この夏、24年かかりにスカートを脱いだ。趣味でエレキギターも始めた。暑さが和らいだし、マラソンも再開しよう決めていく。(茨城支部)



地図に残る仕事。

大成建設グループ

大成建設 大成ロテック 大成有楽不動産 ビーエス・インフラストラクチャー 大成エー&シー 大成設備 成和リニューアールワークス 大成有楽不動産販売 大成建設ハウジング 佐藤秀 大成建設ICTソリューションズ